

〈資料紹介〉『少国民文学』貳月号（みたみ出版、1945年2月）
目次および解題

〈Introduction of Materials〉 "Shokokumin Bungaku" February
issue (Mitami Shuppan, 1945,2) Table of contents and a
description

大木 葉子*
Yoko OKI*

概要

"Shokokumin Bungaku" (published by Mitami Shuppan), a children's literature magazine for adults, was first published in November 1944. Although this magazine was "the last Shokokumin Zasshi published at the end of the war" and has been regarded as a "hard-to-find children's literature magazine," little research has been conducted on it, and it has been regarded as a magazine that ceased publication after only its first issue. However, as a result of the author's research and collection of related materials to clarify the status of children's literature during the war, it was discovered that the February issue was published the following February, 1945. In addition, the editorial postscript clarifies the circumstances that delayed the publication of the February issue and the specific circumstances that led to its publication under extremely difficult circumstances.

In light of the above, this report presents the table of contents of "Shokokumin Bungaku" including the first issue and the February 1945 issue (February 1945), published by Mitami Shuppan, and clarifies the circumstances surrounding the publication of the February issue.

1 はじめに

『少国民文学』（みたみ出版）は1944年11月に創刊された、成人対象の児童文学雑誌である。編集責任を野長瀬正夫が務め、情報局文芸課の斡旋のもとに児童文学作家の新人育成を目的に創刊された。概要は以下の通りである。

- ・ 発行兼印刷人：河野清一
- ・ 編集人：野長瀬正夫
- ・ 発行所：みたみ出版株式会社¹
- ・ 印刷所：帝国印刷株式会社
- ・ A5版

- ・ 定価一部：五十銭、特別行為税相当額五銭：
合計売価五十五銭

なお、『少国民文学』（みたみ出版）には、先行する同名の日本少国民文化協会文学部会の機関誌『少国民文学』（東宛書房）が存在する。両雑誌には執筆者の重なりが認められ、また編集責任者であった野長瀬が『少国民文学』（東宛書房）において第3号の編集実務を担当していたという経緯もあり、関係が深かったことが指摘されているが、別雑誌である²。

本雑誌は戦争末期に出版された「戦時期

2023年10月6日受理

*総合教育センター 准教授

最後の少国民雑誌」であり、従来「入手困難の幻の児童文学雑誌」とされ³、1985年に山本明が目次を整理発表した以外はほとんど研究が進められてこなかった。目次を整理した山本明自身も「なぜ、少国民文化協会文学部会機関誌『少国民文学』が一九四三年七月号以降は休刊となり、『少国民文化』休刊の直前に、みたみ出版から、商業誌として『少国民文学』が発行できたのか、私には理解できないのである」と述べており詳細については不明な点が多いことを指摘している⁴。その後1991年にエムティ出版より復刻版が出版され内実が明らかになったが、その後も十分な検討がなされているとは言い難い状況にある。

しかし既述の通り、少国民文化協会と深いかわりを持つ本雑誌は、戦時下最後の児童文学・児童文化状況を明らかにする貴重な資料として重要な意義を持つものであると考えられる。その点に関して復刻版の解説を担当した滑川道夫は1943年に少国民文化協会の改革が行われたことを指摘したうえで、次のように述べる。

翌年（一九四三）十一月に創刊した「少国民文学」も右の改革の精神を体して編集されている。その視点から読みとってみるべきである。

たとえば論説「伝統の継承」（房内幸成）は、叙上の改革派の立場から、この時点における日本の芸術文化の担い手たちを批判し、少国民文学にいらだちをふくんできびしく迫っている。（中略）

このほか、「新しき少国民文学の待望」（岩崎純考・日本出版会少国民班長）、「美しき夢をこそ一少国民読物への要望」（寺崎浩・作家）、「満々たる自信をもって堂々たる企画を」（佐伯郁郎・情報局情報官）、「ほがひびとの歌」（保田與重郎・評論家）、「希望する新人作家」（山本和夫・詩人）の論考を、房内論考と比較して戦中期の児童文学を探求するのは、興味ある課題の一つであろう⁵。

滑川の指摘の通り、戦争末期の少国民文化協会状況および戦時下の児童文学状況を明らかにするためにも今後の研究の進展が期待される場所である。

従来、『少国民文学』（みたみ出版）は、「創刊号」のみで廃刊となった雑誌とされてきた。既述の山本も「本誌は創刊号だけで、二号は刊行されなかった」としており⁶、また、復刻版解説にお

いて滑川道夫も「戦時期最後の少国民雑誌として一号きりで終わった。創刊の月の二十四日にアリアナ基地のB29約七十機が東京を初爆撃した。もはや本誌続刊不可能な事態になっていく。やがて東京大空襲につらになっていく。ために本誌は入手困難の幻の児童文学雑誌といわれていた。少国民文学の命運を象徴するかのよう創刊号が終刊号となって消え去った。」と戦局の悪化の影響で創刊号のみの雑誌であったとする⁷。

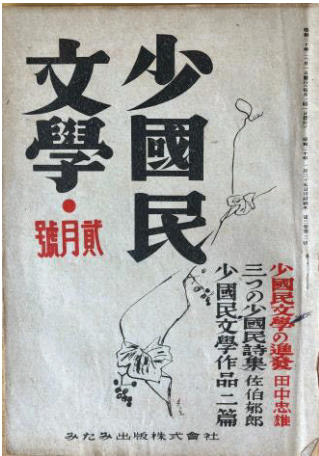
しかし、今回筆者が、戦時下の児童文学状況を明らかにすべく改めて関係資料を収集・調査したところ、翌年1945年2月に貳月号が出版されていたことが明らかになった。同時にその巻末に記載された編集後記より貳月号出版が遅れた経緯および具体的な出版状況が明らかになり、非常な困難の中で出版に至った経緯が明らかになった。そこには戦争末期の緊迫した状況の中での出版であったことが記されており、戦争末期の出版状況を具体的に伝える資料としても貴重な価値を持つものであると考えられる。

以上の経緯を踏まえ、本稿ではこれまで創刊号のみで終刊とされてきた『少国民文学』（みたみ出版）の現在判明している範囲における全体像を明らかにすべく、創刊号並びに1945年2月発行の「貳月号」も含めた目次を作成するとともに、「貳月号」出版の経緯についても報告することとする。

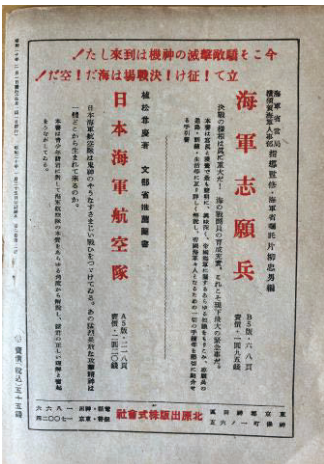
2 「貳月号」出版までの経緯

「貳月号」は奥付によると1945年1月25日印刷納本、同2月1日に発行されている。概要は創刊号同様に、発行兼印刷人が河野清一、編集人が野長瀬正夫、発行所がみたみ出版株式会社、印刷所が帝国印刷株式会社である。表紙の挿絵、裏表紙の広告共に創刊号と同じとなっている。

（写真1）（写真2）



(写真1 表紙)



(写真2 裏表紙)

出版の経緯を示す「編輯後記」を以下に引用する。少々長い引用となるが、戦争末期の出版状況を示す貴重な資料として、全文を記載する。(写真3)

△創刊号に引続き十二月号の作製も困難を極めた。殊にそれは、印刷所に於て、甚しかった。

資材不足。人手不足。

あらゆる戦時的な、不利な条件と闘って、それでも、帝国印刷・愛宕工場に於ては、我が「少国民文学」誌のために、献身的な努力を重ねて呉れたのである。

△忘れもしない。十二月号が製本完了し、おそまきながら本社の倉庫へ搬入されたのは暮も押しつまった三十日のひるまへであっ

た。

△その翌る日の夜である。一昔以前ならば、寒山寺の除夜の鐘でもラヂオの放送で聞けようと言ふ運命的な時刻に、本社は不可抗力的な災火のため、本社屋諸共一片の灰塵に帰したのである。

△山積された配給されたばかりの紙、日配へ納入するばかりになってゐた夥しい書籍、二つの倉庫、そして、少国民文学十二月号、更に割付完了せる新年特大号の原稿、一切は焰の中に消えてしまったのである。

△本来ならば、十二月号を再現出する事は不可能なのであるが、幸ひ愛宕工場にその紙型が保存されてあったので、取敢ず表紙と奥附の一頁だけを入替へ、二月号として、諸氏へおくり得たのである。

△本社もこの新発足を機会に、書籍、雑誌共に編輯陣容を革新し、高くは民主々義撃滅、皇道精神昂揚、切実なる決戦への叫びとしては、戦力増強米英撃滅、そして次代を背負ふ少国民の新育成を目指し、倒れて後も止まじの気概を以て邁進する覚悟である。

△本社に於ては、上は社長より下は我々一編輯子に至るまで、既に決意は定まってゐる。幾度災禍を受くるとも、社に一人たりとも人員のある限りは、みたまの大旗の下、出版報國への進撃を続けるであらう。一月九日、神田区龜住町十一番地の仮事務所にてしるす。

(電話下谷(83)五九五番)

(係)



(写真3 編輯後記)

「編輯後記」の記述からは、1944年12月31日の夜に、納入するばかりとなっていた『少国民文学』12月号をはじめ、割付を完了していた新年特大号の原稿が「不可抗力的な災火」のために「焰の中に消えてしまった」ことが確認できる。ここに記されている「不可抗力的な災火」については具体的には明らかにされていないが、続く「幾度災禍を受くとも、社に一人たりとも人員のある限りは、みたまの大旗の下、出版報国への進撃を続けるであらう」という記述からは、米軍による空襲の被害にあったことが想定される。実際に当時の東京の戦災史を記録した『東京都戦災史』によると、1944年12月31日の夜に東京神田地区を中心に米軍による空爆が行われていたことが確認できる。

12月31日の空襲は21時43分から、22時10分にわたる第1次空襲と、深夜23時50分から、0時30分に至る第2次空襲とで、来襲敵機はB292機で東京に侵入するや分散攻撃にうつり夫々多数の焼夷弾を投下した。被害地域は第1次に神田区、本郷区、下谷区、浅草区等であり、第2次空襲では神田区、下谷区、浅草区、向島区の各一部であった。

B292機の侵入は警報発令後、比較的早く襲撃された為と、小型油脂焼夷弾を多量に投下された為、多発火災発生し、家屋の密度濃厚な地域なるに因り、忽ち合流拡大して、思わざる被害を生じた⁸。

帝都防空本部発表（情報 第56号（31日23時30分））によると、神田区の被害は「(1)区内ノ罹災地域ハ亀住町、元佐久間町、栄町、五軒町ニシテ現在迄ノ焼失戸数ハ約150戸ナリ」であったとされ⁹、「本社」とされるみたま出版があった「東京都神田区元佐久間町拾番地」（現在の千代田区外神田付近）も被害を受けた可能性が高いと思われる¹⁰。そうした中で「愛宕工場にその紙型が保存されてあったので、取敢ず表紙と奥附の一頁だけを入替へ、二月号として」出版に至ったことが明らかにされている。ここで愛宕工場とされているのは印刷所であった帝国印刷株式会社があった「東京都芝区愛宕町二丁目拾四番地」（現在の港区西新橋付近）を指すものと考えられ、12月31日の空襲での被害は免れているため、そこに保管されていた紙型をもとに、同じく空襲の被害を受けていた隣接する神田区亀住町（現在の千代田区外神田付近）に仮事務所を構え「貳月号」として出版したのと考えられる。12月31日夜の空

爆で「本社屋諸共一片の灰塵に帰した」という困難の中で、「一月九日」という直後に、仮の電話番号と仮事務所の場所を記すとともに、今後への決意を述べ、創刊号においては編集を担当した山本和夫が書いていた「編輯後記」が「係」の手によるものであることを記したこの「編輯後記」は、まさに戦争末期のぎりぎりの出版状況を生々しく伝える貴重な資料であるといえるだろう。

当時の児童図書出版が空襲により非常に困難な状況にあったことは、この時期に少国民文化協会の職員であった小出正吾の証言からも確認できる。

B29の東京初空襲はこの年（昭和19年—引用者注）の十一月一日の出来事だった。それからは文字通り本土決戦の様相となり、銀座も爆撃されて、三越の事務所（当時日本少国民文化協会は銀座三越を事務所にしていて—引用者注）でも空襲警報の連続で階段に蹲っている時間の方が多様な日が続いた。内務省から保管を委託されていた多数の児童図書は、神宮近くの久留島武彦団長の早蕨幼稚園へ移動してあったのだが、それも空襲で全焼してしまい、私は内務省から始末書を取られた¹¹。

こうした記録からは、激しくなる空襲の中、資料の移動と焼失を繰り返すというぎりぎりの状況の中で出版が試みられていたことが確認でき、戦時下における児童図書出版の様子的一端が明らかになるものと考えられる。

今回〈資料〉として紹介する『少国民文学』（みたま出版）「貳月号」は、その後の調査で、「日本近代文学館」（東京都目黒区駒場 4-3-55）と、大阪府立中央図書館「国際児童文学館」（東大阪市荒本北1-2-1）の2機関に収蔵されていることが確認できた。いずれも落丁等なく、すべてのページがそろっていることを確認した。また2機関共に予約の上、閲覧は可能となっている。

3 「貳月号」の意義

最後に「貳月号」の意義についてまとめる。まず1点目としては、既述の通り、戦争末期の空襲が激化する中での緊迫した状況下での児童図書出版の実際を具体的に伝える資料としての価値があると考えられる。出版社の状況のみならず、印刷所や配本状況等も含めて今後の研究に寄与する点が大きいのと思われる。

2点目としては掲載記事の内容があげられる。創刊号には保田與重郎の評論、「ほがひびとの歌（一）」が掲載されたが、文末に「次号完結」と記されており、未完成となっている。この点に関しては、従来創刊号のみとされていたためその初出の全体像が不明となっていたが、「貳月号」に「ほがひびとの歌（承前）」が掲載されており、全体像が確認できる¹²。『万葉集』16巻の「乞食者詠」をテーマにした本評論は、戦時下における古典認識、少国民への思想教育の一端を示す資料として、今後の研究が期待されるものである。加えて少国民文化協会の中心にあった佐伯郁郎の評論（「三つの少国民詩集」）及び「少国民文学作品」として与田準一、巽聖歌の詩作品、水谷まさるや伊藤佐喜雄の散文作品等、8作品が掲載されており、戦争末期の少国民文学の実像の一端を示すものとしても貴重な資料と考えられる。

また、既述の滑川の指摘にもあった通り、当時の少国民文化協会のあり方等をうかがわせる資料としても検討する余地が残されており、今後の研究が期待される。

以上の点も含めて、『少国民文学』の詳細な検討については今後の課題としたい。

（注）

- 1 上田信道は出版元について、「版元は四四年ごろの創業で文芸書類を出版、敗戦後まもなく廃業した」と述べている。（上田信道「少国民文学」『日本児童文学大事典』第二巻、大日本図書、1993.10、p559）
- 2 両雑誌を異誌とみなす根拠として滑川道夫は以下のように述べている。

異誌と呼ぶのはつぎの理由からである。日本少国民文化協会文学部会編集の「少国民文学」は、一九四三（昭和十八）年五月一七月号の三号だけで休刊し、協会としてはそのまま復刊に至らずに終刊している。この翌年七月東条内閣が総辞職し、マリアナ沖海戦にレイテ沖海戦にと主力を失い敗色いよいよ濃くなりつつあった。本土決戦、一億総武装の呼号の状況下に、みたま出版株式会社（河野清一）から同名の「少国民文学」を一九四四（昭和一九）年十一月一日に創刊している。前年の協会文学部会編集とは異なるものであるから発行元も意識的に「創刊号」と明記している。その点で

前の「少国民文学」の復刊ではなく新雑誌と見るべきものである。

しかし、内容的には、執筆者も編集者も協会の会員であり、趣旨においても「少国民文学作家の新人育成機関」を志向している点も共通性をもっているし、少国民文化協会文学部会との協力関係もはっきりしている点で明らかに前誌の系譜に位置づけられる性格をもっている。（中略）

「少国民文学」が三号で終わってしまうことを惜しんで、未発行の第四号の予定原稿を中心に続刊に奔走した。そして情報局文芸課長井上司朗（歌人・逗子八郎）の斡旋によって「創刊号」と明記して世に出ることになる。

- 滑川道夫「解説「少国民文学」の性格」（『少国民文化』第7巻、エムティ出版、1991.6）
- 3 滑川道夫「解説「少国民文学」の性格」（前掲注2）
- 4 山本明「一五年戦争末期の雑誌（三）一少国民文化協会の出版物一」（『評論・社会科学』27号、1985.5、p151）
- 5 滑川道夫「解説「少国民文学」の性格」（前掲注2）
- 6 山本明「一五年戦争末期の雑誌（三）一少国民文化協会の出版物一」（前掲注4、p151）
- 7 滑川道夫「解説「少国民文学」の性格」（前掲注2）。同様に以下の記述においても創刊号のみの雑誌であったとされている。
 - ・菅忠道・鳥越信編「日本児童文学年表（四）」（『日本児童文学大系（4）』三一書房、1955.7）「1944年11月「少国民文学」創刊（山本和夫主宰）一号で廃刊。」（p407）
 - ・山中恒『少国民戦争文化史』（辺境社、2013.10）「雑誌「少国民文学」は情報局文芸課の斡旋で刊行されたもので、結局、三号雑誌どころか一号で終焉した雑誌で、編集長は詩人の野長瀬正夫、発行は「みたま出版株式会社」であった。」（p480）
- 8 東京都編『東京都戦災史』（信陽堂、1953.3、p286）
- 9 東京都編『東京都戦災史』（前掲注8、p286）
- 10 以下現在の町名については、「千代田区新旧町名対照表」及び「港区芝地区の旧町名」を参照した。
<https://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/mac>

hizukuri/tochi/jukyohyoji/shinkyu.html
 https://www.city.minato.tokyo.jp/shibam
 achitan/shiba/koho/kyuchome.html

- 11 小出正吾「戦時下の児童文学—童話作家協会・日本少国民文化協会時代の回想—」(『日本児童文学』第17巻第12号、1971.12、p 28)
- 12 『保田與重郎全集』第二十二巻(講談社、1987.8)には「ほがひびとの歌」が収録されているが、末尾の「為蟹述痛作」が削除されている。また本文において初出とは異同があることが今回の調査で確認できた。『保田與重郎全集』では刊行が予定されながらも未刊行となった『復古論』の中的一篇として収録されており、保田が内容を認めた目録に基づき、解題では「『少国民文学』創刊号(昭和十九年十一月、みたみ出版株式会社発行)並びに同年十二月号に掲載された。十二月号に掲載の末尾に「参考・前号に引用した萬葉集十六ノ巻の^{ホガヒビトノウタ}乞食者詠二首の内」として「為蟹述痛作」を掲げているのは削除した。」とされている。

4 『少国民文学』(みたみ出版)(1944.11～1945.2) 目次

【凡例】

- ・ 旧字体は必要に応じて新字体に改めた。
- ・ タイトルは原則として本文からとり、各号の目次に記載のタイトルと本文中のタイトルが異なる場合、本文タイトルを採用した。
- ・ ジャンルは原則として各号の目次および本文中の表記に従った。
- ・ 各号の目次はジャンルごとに記載されているが、本目次では本文の掲載順とした。

—参考文献—

- ・ 東京都編『東京都戦災史』(信陽堂、1953.3)
- ・ 菅忠道・鳥越信編「日本児童文学年表(四)」(『日本児童文学大系(4)』三一書房、1955.7)
- ・ 小出正吾「戦時下の児童文学—童話作家協会・日本少国民協会時代の回想—」(『日本児童文学』第17巻第12号、1971.12)
- ・ 関英雄『体験的児童文学史 後編』(理論社、1984.12)
- ・ 山本明「一五年戦争末期の雑誌(三) —少国民文化協会の出版物—」(『評論・社会科学』27号、1985.5)
- ・ 滑川道夫「解説「少国民文学」の性格」(『少国民文化』第7巻、エムティ出版、1991.6)
- ・ 上田信道「少国民文学」(『児童文学大事典』第二巻、大日本図書、1993.10)
- ・ 山中恒『少国民戦争文化史』(辺境社、2013.10)

* 本研究は JSPS 科研費(22K00345)の助成を受けた研究成果の一部である。

『少国民文学』創刊号（みたま出版、1944.11）

タイトル	筆者	ジャンル	肩書	ページ
創刊ノ辞				
創刊号 目次				
少国民文学の行くべき道	井上司朗		情報局文芸課長	1
ほがひびとの歌（一）	保田與重郎			2～5
伝統の継承	房内幸成			6～10
農村学童と少国民読物	野長瀬正夫			10
大和の血	與田準一	詩		11
新人作家への熱望／新しき少国民文学の待望	岩崎純孝		日本出版会少国民班長	12～15
勝負	塚原健二郎	壁童話		13
新人作家への熱望／美しき夢をこそ一少国民読物への要望	寺崎浩			15～ 17、47
弓の字型の金具—工場の黒板童話として	小林純一	壁童話		16～17
牛荘の町	小出正吾	創作		18～25
武士のやくそく	榊山潤	創作		26～31
満々たる自信をもって堂々たる企画を	佐伯郁郎		情報局情報官	32～36
一等入選作 お山の杉の子	作詞：吉田テフ子 作曲 佐々木英	日本少国民文化協会制定・軍事保護院献納少国民歌		36
新人待望／希望する新人作家	山本和夫			37
少年航空兵—帰郷報告記	日比野士朗			38～40
朗読文学研究会少国民文協にて開催		朗読文学研究会報告		40
通忠初陣	加藤武雄	創作		41～47
原稿募集		少国民文学募集規定		48
編輯後記	野長瀬正夫			48
	山本和夫			48

『少国民文学』貳月号（みたま出版、1945.2）

タイトル	著者	ジャンル	肩書	ページ
発刊の主旨				
少国民文学 二月号 目次				
少国民作家への希望	栗原悦蔵		大本営海軍報道部長 海軍大佐	1
少国民文学の進発	田中忠雄			2～5
三つの少国民詩集	佐伯郁郎			6～11
机三代	與田準一	詩		12～13
疎開の子供・田舎の子供				
都会の少国民	都築益世		医学博士	14～16
感情の飢え	熊谷宏			16～18
田舎の少国民と勤労	丸山義二			18～20
ぼくはひとりで	巽聖歌	詩		21
軍歌	玉井政雄	少国民文学作品		22～25
關帝さま	里村欣三	少国民文学作品		25～28
鵲	望月芳郎	壁童話		29
たつとい手	水谷まさる	壁童話		29
ほがひびとの歌（承前）	保田與重郎			30～37
寫真帖	伊藤佐喜雄	少国民文学作品		38～42
霧の中	中川静村	少国民文学作品		43～47
原稿募集				48
編輯後記	係			48